

震災語り部プログラム「ツナミリアル」の効果検証に関する実験的研究

東北大学 工学部 学生会員 ○若木 望
 東北大学 災害科学国際研究所 正会員 佐藤 翔輔
 東北大学大学院 工学研究科 学生会員 渡邊 勇
 東北大学 災害科学国際研究所 正会員 今村 文彦

1. はじめに

東日本大震災の被災地では、語り部による震災伝承が盛んに行われている。語り部による震災伝承は、効果的である一方で問題点も指摘されている。所要時間が長い、語り手から聞き手への一方向コミュニケーションに留まってしまうといったことが挙げられている¹⁾。著者らは、上記の課題を解決するため、短時間でより効果的な学習をすることを意図した震災学習プログラム「ツナミリアル」を設計・提案している¹⁾。

「ツナミリアル」は全行程が30分程度で完了する短時間学習であることが最大の特徴である。プログラムは1) 導入、2) 語りを聞く、3) ふりかえりの3パートに分かれる。1) では、参加者はこれから語られる内容について、同じ立場（状況）であったときにどんな危機や決断に迫られるかを想像してワークシートに記入する。2) では10分程度の語りを聴く。語りは話し手の体験をもとにしたものであり、語り内容はエピソードと教訓が対応した構成になっている。また、語りの際には語り部が著者らと共同で作成したスライドを用いる。このとき、参加者は語りを聞いて「意外だったこと」をワークシートに箇条書きで列挙する。3) ふりかえりでは、参加者は語りを聴いて「すぐに行動したいと思ったこと」を記入する。このように参加者がただ語りを聴くだけの受け身にならないように、ワークシートを記入する形式を取り入れている。

本研究では「ツナミリアル」が通常語り部講話と比較して学習効果にどのような差があるのかを明らかにするため、実験的研究によって評価を行う。

2. 研究方法

(1) 実験デザイン

「ツナミリアル」は上記のように「語り時間が短い」「双方向型」を2つの特徴としている。この2つの特徴に注目し、「語り時間が長い/短い」「ツナミリアル形

表1 実験した4形式の概要

タイトル	語り部	語り時間	形式	参加者	参加者数
通常講話	A氏	45分	通常講話	大学生	22
通常講話（時短）	A氏	15分	通常講話	大学生	22
ツナミリアル	A氏	15分	ツナミリアル	大学生	24
ロング版ツナミリアル	A氏	45分	ツナミリアル	大学生	29

式/通常講話形式」の2つの条件を変えた4形式のプログラムを実際に実施した。東北大学の学生に各群25名程度を想定して募集した。本研究では形式以外の条件を揃えるため、語りは4群で同一人物による同じ内容である。表1に4形式の概要を示した。

また学習効果を測定するための質問紙調査をプログラムの事前と事後で実施した。

(2) 学習効果の測定

本研究ではプログラムの学習効果として、a. 没入感とb. 記憶量の2つの概念に注目した。

a. 語りへの没入感

語り部学習では災害を体験できることが効用の1つである。語りにどれだけ没入できたかを測定するために、佐藤ら²⁾の移入尺度短縮版を用いた。同尺度は5項目からなり「語り部さんのお話を聞いているとき、以下の文で書かれている内容はあなた自身にどれくらい当てはまっていたか。」と教示し、5件法（全く当てはまらない-非常にあてはまる）で評定させた。

b. 記憶量

語り部学習では体験や教訓を伝えることが目的の1つである。伝わった状態を評価するために、語りをどれだけ記憶できたかを評価する必要がある。プログラムの直後に、語られたことの中でおぼえていることを箇条書きで列挙させる再生課題（上限：20件）をさせた。

キーワード 震災伝承、震災学習、防災教育、語り部

連絡先 〒980-8572 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 468-1-E305 TEL : 022-752-2089

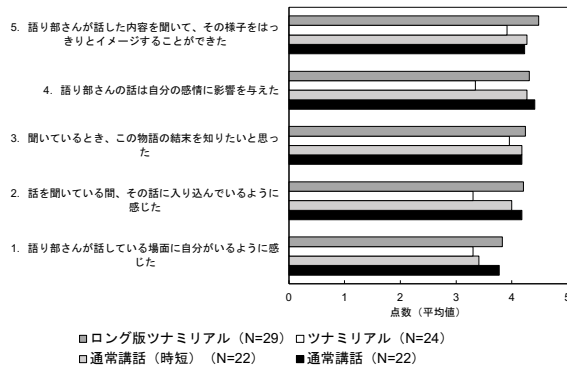


図1 移入尺度5項目の結果比較

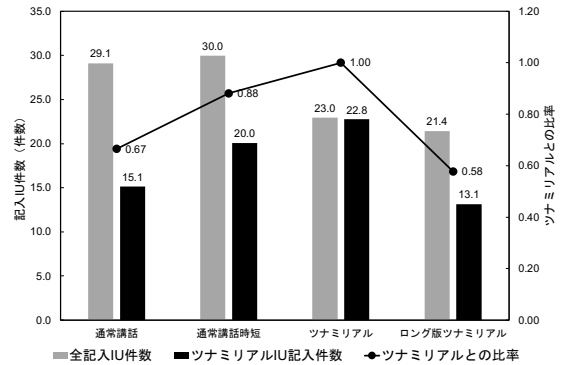


図2 ツナミリアル IU 数の比較

3. 結果・考察

(1)語りへの没入感

図1に移入尺度5項目の結果を示した。全くあてはまらないを1、非常にあてはまるを5として平均点数を5項目ごとに算出した。全体傾向ではツナミリアルが他の3群と比較して低く、2と4の項目では特に低い。

ツナミリアルの語りでは、時系列で避難行動を語るのではなく、教訓に対応するエピソードを語る形式になっている。この形式だと避難行動の流れを聞いている途中で話題が区切られるため、語りへの没入しにくかったと考えられる。一方で、ロング版ツナミリアルでは没入感が低くなかったため、教訓を強調した語りでも十分に情報を提供すれば没入感を損なわないことがわかる。ツナミリアルの時短語りでは情報量が少なくなってしまうが、語りの中で避難行動のボリュームを増やす必要がある。

(2)記憶量

再生課題の結果を分析するため、本研究では分析単位として佐藤ら²⁾のアイデアユニット (IU) の計測方法を用いた。まず、4形式で語られた内容をIUにそれぞれ分割した。4形式の語りはそれぞれ時間・形式が異なるが、共通の被災体験を題材にしているため内容の被りが存在する。その箇所は共通のIUとした。また、ツナミリアルの内容は語り部の題材の中でも特に重要な内容となっており、この内容は他の3群にも全て含まれている。上記のIU分割を用いて再生課題の文をIU認定した。全IUとツナミリアルのIUの再生課題に含まれる件数を集計した。

図2にツナミリアルのIU記入件数(平均値)の比較結果を示した。4群で比較するとツナミリアル、通常講話時短が高い値を取っている。ツナミリアルIUの記入

件数が高いことは、語りの重要部分をよく記憶できたことを表してしている。長時間の語りでは、補完的な情報が多く提供されたために重要な情報を記憶できなかったと考えられる。ツナミリアルと同様の教訓を強調したロング版ツナミリアルでも低かったことから、語り時間が長いと重要な箇所を記憶できなくなる可能性がある。

4. おわりに

本研究では震災語り部プログラム「ツナミリアル」の効果を検証するために4群比較の実験を行なった。その結果、ツナミリアルは他の3群と比べて没入感が低く、語り時間を短くした2群では語りにおける重要なパートの記憶量が高いという結果が得られた。

「ツナミリアル」は語り時間を短縮したが、教訓や被災体験を伝えるという観点では、通常語り部講話と比べて大きく劣らず、語りの重要部分を伝える上では優れていると言える。一方で、災害を体験する上で重要な没入感がやや損なわれたことが示唆された。

今後は長期的な記憶や、意識の変化や防災行動変容などを検証していきたい。

参考文献

- 1) 佐藤翔輔, 大須武則, 黒澤健一: 語り部学習を活用した時短型・災害疑似体験学習プログラム「ツナミリアル」の開発と試行, 地域安全学会梗概集, No.50, pp.225-228, 2022.5.20.
- 2) 佐藤翔輔, 邑本俊亮, 新国佳祐, 今村文彦: 震災体験の「語り」が生理・心理・記憶に及ぼす影響: 語り部本人・弟子・映像・音声・テキストの違いに着目した実験的研究, 地域安全学会論文集, No.35, pp.115-124, 2019.11.